

第 1 回会合における論点ごとの主な議論

主な論点	第 1 回会合における主な議論（事務局まとめ）
<p>1. ソフト面</p> <p>● 「健康でアクティブな生活」を支援する観点から、各人の状況・能力・経験等に即したプログラムをどのように開発し、提供していくか。</p>	<p>○ 課題解決型のプランではなく、シニアライフを通じて、何がしたいか、どのような人生を送りたいかという目標を立て、その目標の実現に向けた具体的な行動計画を策定する目標志向型のプランが必要。あわせて、高齢者による目標志向型プランのプランニングを助けるコーディネーターが必要。</p> <p>○ 目標志向型プランでは、なりたい自分と、それを可能にする地域資源とのマッチングが必要。具体的には、自然環境、社会環境（文化・伝統・ボランティア・地域活動等）、文教施設、高齢者の支援を必要とする場・人々（児童生徒・障害者等）といった地域資源・環境とのマッチングを行いつつ、高齢者個人の資源（今までの人生で得られたスキル・教養・経験等）を活用するとともに、ボランティア活動・地域活動・農業等への参加を通じて高齢者個人のポテンシャルを開拓していくという視点が重要。</p> <p>○ 目標志向型プランについて、PDCA サイクルを回すことが必要。Plan 段階では、「△◇ができるような○▽歳の生活」といった目標を立て、コーディネーターと相談しつつ、目標達成に向けた具体策を盛り込んだ行動計画を策定する。このプランに沿って半年程度実行（Do）した上で、Check 段階として、アウトプット評価（何をどうしてきたか）とアウトカム評価（満足度・生きがい・健康度）を行い、改善点をコーディネーターと話し合う。その上で、プランの改善を図り、再実行する（Act）。</p>

主な論点	第1回会合における主な議論（事務局まとめ）
<p>1. ソフト面（続き）</p> <p>● 仕事や社会活動等への参加を基本とすべきとの意見があるが、どう考えるか。</p>	<p>○ 日本版 CCRC は、「隠居の場」ではなく、「第二の現役の場」であり、受け身の関わりではなく、高齢者が主体的に社会参加できるようにすることが必要。</p> <p>○ 生きがい・人生の目的を強く感じている者は健康寿命が長く、高齢者の社会参加（就業、地域活動等）が活発な地域ほど健康寿命は長い。このため、高齢者の生きがい・社会参加の促進を図ることによって、健康長寿の推進にもつながる。</p> <p>○ 若干の費用をもらって、CCRC の住民どうしでの簡単なレベルの介護・家族支援、地域の子育て世代に対するアドバイスや困った時の世話、地域住民の集う場での喫茶店運営などを実施する互助のビジネスモデル化を図ることが重要。</p> <p>○ 米国では、大学での生涯学習への参加を入居条件とする CCRC があるが、高齢者の人気を呼んでいる。</p> <p>○ 若年人口が減少し、大学の経営が厳しくなっているため、大学が高齢者の生涯学習に貢献しやすくなっている。</p>
<p>● 医療・介護を必要とする場合の「継続的なケア」を確保するために、どのような具体的方策を講じていくか（ケアパス、ケア体制、健康情報管理等）。</p>	<p>○ 地方への定住に当たっては、継続的なケアの確保が切実な課題。いざという時に医療が提供される環境整備が必要。</p>
<p>● 地域社会に馴染みながら移住するために、事前相談、お試し居住等のきめ細かな支援をどのように推進していくか。</p>	
<p>● 地元住民との積極的な共働を、どのように推進していくか。</p>	<p>○ 若干の費用をもらって、地域の子育て世代に対するアドバイスや困った時の世話、地域住民の集う場での喫茶店運営などを実施する互助のビジネスモデル化を図ることが重要。（再掲）</p>

主な論点	第1回会合における主な議論（事務局まとめ）
<p>1. ソフト面（続き）</p> <p>● ソフト面全般のコーディネートを行う人材の役割や配置について、どう考えるか。</p>	<p>○ 地域のことや、まちづくり・福祉など、関連する事項を広く浅く知っていて、人と人をつなぎ、日本版 CCRC をマネジメントするようなコーディネーターが必要。</p> <p>○ コーディネーターは、「健康でアクティブな生活」を支援するための目標志向型プランの立案や評価・改善に当たって、高齢者への相談支援を行う。</p>
<p>2. ハード面</p> <p>● 自立した生活ができる居住環境の確保という観点から、ハード面における具体的な条件（居室、構造等）をどう考えるか。</p> <p>● 地域資源や既存ストックを活用した多様な立地・住宅構造・サービス機能の類型を、どう整理するか。</p>	<p>○ 共有空間を活用した多様なアクティビティが提供されるとともに、これまでの人生を継続でき、プライバシーが保護される必要があり、共同生活と個人生活のバランスが取れたまちづくりが必要。</p> <p>○ ハードから新たに作っていくのか、空き家等の既存ストックを活用したソフト中心のシステムとするのかの検討が必要。</p> <p>○ 地域の木材や地域の工務店など、地域の資源を活用していくことによって、地域活性化につなげていくことも大切。</p> <p>○ 地域の良さは外部の人間の方が知っていることも多いので、大手の開発業者などの知見も活用していくべき。</p>

主な論点	第1回会合における主な議論（事務局まとめ）
<p>3. 事業運営面</p> <p>● 居住者の参画やコミュニティ運営等に関する情報公開を推進するために、どのような方策を講じていくか。</p>	<p>○ 主体的な社会参加という観点から、高齢者自身がコミュニティを運営するという視点が必要。</p> <p>○ 入居後の参画だけでなく、コミュニティのプランニングの段階から居住者が参画していくことが大切。コミュニティを作る前から打合せや勉強会を行って、どういうコミュニティづくりをしたいかを居住者が決定していくべき。</p> <p>○ 米国では、州単位で、CCRC 促進のためのインセンティブを講じるとともに、情報公開の実施等の規制を講じている。</p>
<p>● 行政による指導監督や民間外部機関による格付認証の実施について、どう考えるか。</p>	<p>○ 米国では、認証機関が CCRC のハード・ソフト・財務状況・ガバナンスを評価し、格付認証を行っているが、こういう仕掛けも大事。</p>
<p>● 民間企業を始め多様な事業主体の参加を図るとともに、事業の継続性を確保するため、どのような方策が必要か。</p>	<p>○ 高齢化が進んだ地方のコミュニティを経営することによって、タウン型の CCRC に移行していけるようにすることも検討すべき。</p> <p>○ 日本版 CCRC の立ち上げに当たっては、企画立案や資金集め等を行うプロデューサーのような人材が必要。</p> <p>○ 都心部や駅前への居住希望が多い中で、日本版 CCRC へ入居するメリットを感じられるようにするための戦略が大切。</p> <p>○ 一定の年齢層だけが一度に入居すると、一気に要介護度が高くなり、アクティブな CCRC ではなくなってしまう可能性がある。入居者の循環を考えるとともに、健康な者と医療・介護を必要とする者が共生する状況をどう作り出すかを検討することが必要。</p>

主な論点	第1回会合における主な議論（事務局まとめ）
<p>3. 事業運営面（続き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 可能な限り多くの高齢者の希望を実現するという観点を踏まえつつ、居住者のコストや年齢層をどのように考えていくか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 富裕層だけでなく、一般的な退職者が利用できるモデルを考えていくべき。具体的には、平均的な年金収入を勘案しながら、日本版 CCRC の料金をイメージした上で、議論を進めていくべき。 ○ 価格は高いが高機能のものなど、ニーズに応じて、色々なバリエーションがある形が望ましい。 ○ 50 歳以上の住み替えの場合は、現在持っている居住用資産の活用が重要。日本版 CCRC への入居に当たって、現在持っている居住用資産を、若年層が買ったり、借りたりする環境を整備することが大切。 ○ ターゲットにする年齢層の検討が必要。50 代が一つのターゲットと考えられるが、その場合には、仕事や生きがいが必要になってくるとされる。 ○ 親の介護などを抱えている世代でもあり、そうした点も考慮すべき。
<p>4. 政策支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 地域の実情等に応じた多様な取組を支援する観点から、関連制度等による支援として、どのような政策支援が考えられるか。 ● 先行的な取組を支援する観点から、「地方創生特区」「地域再生計画」の活用について、どのような活用が考えられるか。 	